○日本のSBIRの方向性として、以下の6点が示されている。
 多段階選抜方式には、デメリットにも留意しつつ、推進していく方向。

- ① 研究開発成果の**広報**
- ② 販路、資金等の**マッチング機会の提供**の一層の充実
- ③ 創業10年以内のベンチャー企業については、**官公需施策**の活用による受注機会の確保
- ④ **異分野**の研究者や組織、大企業との**マッチング**も積極的に誘導
- ⑤ **申請手続の簡素化・共通化**等申請手続の負担軽減
- ⑥ 特定補助金等への**多段階選抜方式**の導入の推進

平成27年度科学技術イノベーションに適した環境創出に係る「重点化対象施策」及び「パッケージ化」について（内閣府）

<段階別競争選抜方式（多段階選抜方式）のメリット・デメリット>

	メリット	デメリット
事業実施側 (各省等)	<ul style="list-style-type: none"> ● F/Sの段階から支援することで、埋もれた技術やアイデアを有する中小企業の発掘に有効 ● 多様なアイデアの中から選抜を行うことで、従来技術の深化にとどまらない新たなビジネスモデルの可能性が高まる ● 選抜により有望な案件への資金投下が可能 ● 成功率の向上が期待できる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 事務経費、中間検査、成果報告書指導など労力が増加 ● 審査委員選定が難しい（特に事業化の目利き可能な委員） ● 技術課題が複数分野に亘るほどマンパワーが必要 ● 研究開発期間が事実上短縮
事業受託側 (事業者)	<ul style="list-style-type: none"> ● R&D前にF/Sがあることで、参加し易い ● 自社の技術・技術シーズの可能性を検証する上で有効 ● R&D移行時の審査により、事業継続の緊張感を維持 ● R&D移行時に、外部審査委員の意見を取入れ、計画修正可能 ● より実用化に近いR&D計画を作成可能 	<ul style="list-style-type: none"> ● 審査増による提出書類等の作成が負担 ● R&D移行時の審査資料作成等に時間を要し、実質的事業期間が短縮 ● R&D遂行の技術力と提案力を有する企業には、F Sの時間が無駄 ● R&D移行不可時のダメージが小規模・零細企業には大きい